## 熊山遺跡とは

標高約500mの熊山山上に位置する奈良時代の遺跡です。露出した岩盤上に基壇を築き、その上に方形の段を三段に積み重ねた特殊な形の石積遺構です。

## 遺跡の特徴

ピラミッドを連想させる階段状に石を積み上げた形状。四方に設けられた龕と呼ばれる神仏を祀る区画。そして中央部には竪穴が設けられるなど、他に例のない構造の遺跡です。

## 指定と修復

熊山遺跡は昭和31（1956）年９月27日に国指定史跡に指定されました。

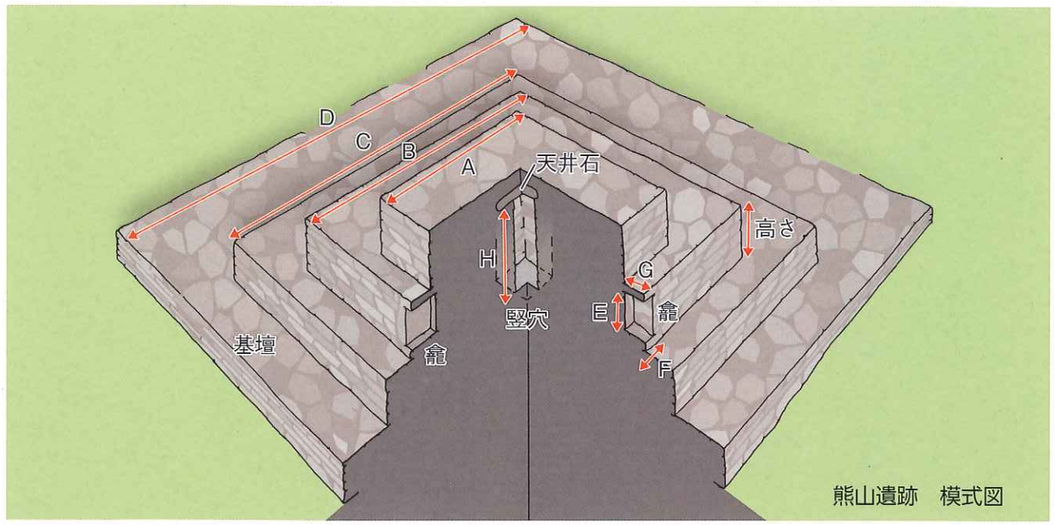
しかし、石積遺構は昭和12（1937）年の盗掘によって石積遺構の西側が破壊されていました。その影響により崩壊が進行したため、昭和47・48（1972・1973）年度に環境整備と緊急調査が実施され、昭和49(1974)年10月から12月にかけて修復が行われました。

## 出土品

昭和12年の盗掘の際、竪穴の内部から陶製筒形容器、三彩小壺、皮製らしき文字の書かれた巻物のようなものが見つかったようです。これらの出土品から熊山遺跡が奈良時代に造られたことが推定されます。残念ながら、陶製筒形容器を除いて行方が分からなくなっています。

↑熊山遺跡（北東から）
岩盤が北から南方向へ傾斜しているため、基壇の高さが北側（写真右側）で低く、南側（写真左奥）で高くなっている。

←陶製筒形容器　天理大学附属天理参考館蔵
熊山遺跡の竪穴から出土。須恵質の堅緻なつくりで、その製作技法から奈良時代のものと考えられる。
５つのパーツからなり、下から順に、扁平な円筒形の基底部、筒状の管３つ、四方に火焔の装飾が付く宝珠のような形の最上部が重なっている。
積み上げた高さは161.0㎝、基底部の直径は46.5㎝。
他に類のない特異な形状で、性格については諸説がある。
（写真提供：天理大学附属天理参考館）




熊山遺跡　模式図

## 構造

基礎を平らにするための基壇、その上に一辺約7.9m、高さ約3.4m、方形三段の段を階段状に重ねた石積遺構です。材質は流紋岩、平たい割り石を積み重ねて形成されています。

中段には、四方の面の中央部分にそれぞれ龕と呼ばれる神仏を祀るための場所が設けられています。

表　計測値（単位：m）

| | 長さ | 南東側高さ |
|---|---|---|
| 上段 A | 3.3～3.6 | 1.2 |
| 中段 B | 5.01～5.4 | 1.2 |
| 下段 C | 7.66～8.00 | 1 |
| 基壇 D | 11.714～11.89 | 0.9 |
| 龕　E | 0.65～0.90 | |
| 龕　F | 0.62～0.73 | |
| 龕　G | 0.90～1.36 | |
| 竪穴 H | 2 | |
| 竪穴 底部 | 0.74×0.81 | |

## 竪穴

石積の中央部は空洞で、高さ約２mの竪穴が設けられています。その底部は74×81㎝の方形ですが、上へいくにつれて形が多角形へと変化します。竪穴の上部は、扁平な一枚石の天井石で蓋をしてあります。

## 熊山遺跡の用途

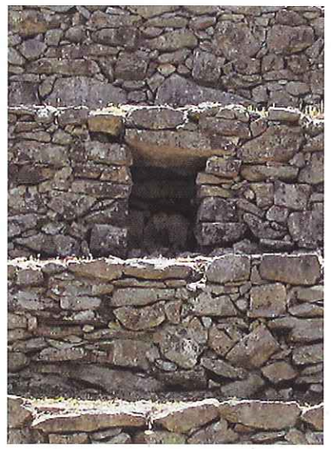
古くはその形状から、僧尼が戒律を授かるための施設である戒壇であったと考えられていたほか、経塚説や墳墓説などが唱えられていました。

しかし、現在では龕や出土品のほか、仏塔である奈良県奈良市頭塔や大阪府堺市土塔と類似している点から、仏教施設と関係する仏塔と考える説が有力です。一方で、誰がどういった背景で造ったのか、未だ謎の多い遺跡といえます。

## 周辺の石積遺構

熊山には熊山遺跡を含め33か所の石積遺構が確認されています。規模や形態、建造された年代は様々のようです。

中世には熊山遺跡周辺が帝釈山霊山寺の伽藍地となるなど、熊山は古代から霊峰として連綿と信仰され続けてきました。周辺の石積遺構は熊山遺跡とは性格が異なり、記念塔や供養塔として建てられたものもあるのかもしれません。



熊山遺跡　東面　龕の様子